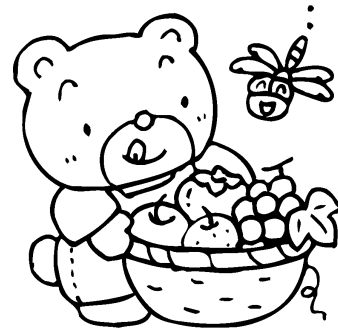




軽・中等度難聴のはなし

残暑もすっかり落ち着き、朝晩に秋らしい風が吹くようになりました。今年度もあっという間に半分が過ぎ、いよいよ後半が始まります。忙しい毎日ですが、季節の移り変わりを子供と一緒に楽しみながら、元気に過ごしていきましょう。

さて、先日の保護者教室は、軽・中等度難聴の当事者である若狭妙子さんの講演でした。現在、本校の乳幼児教育相談に通われている方の約3分の2が、軽・中等度難聴のお子さんたちです。毎年、先輩保護者や当事者の方々にご協力いただき、保護者教室を開催していますが、軽・中等度難聴の聞こえとその心理について、若狭さんほどに語ってくださる方はなかなかいません。若狭さんの貴重なお話を振り返りながら、軽・中等度難聴について本人が語ることがなぜ難しいのかについても考えてみたいと思います。



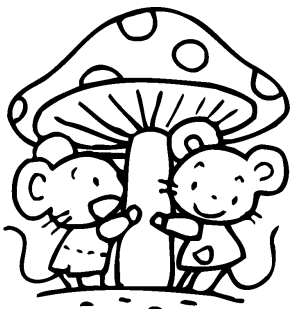
若狭さんは、現在、臨床心理士として京都市聴覚言語障害センターで相談員の仕事をされています。小学校の就学時検診で40dB程度の軽度難聴とわかり、地域の小学校へ入学後は、難聴学級に通いながら過ごしました。その後の中学校、高校も地域の学校で過ごされました。当時はまだ新生児聴覚スクリーニング検査もなく、おしゃべりもし、歌を歌ったり音楽を楽しんだりする様子が見られる軽度難聴児は、幼児期には気づかれないこともありました。そして高校生の時には、吹奏楽部員として過ごしていたこともあってか、聴力が60dB程度に低下し、中等度難聴の聞こえとなりました。

●軽度難聴も中等度難聴も困り感は同じ

意外にも、「聴力が低下したことはショックではなかった」と若狭さんは言います。中等度難聴も軽度難聴もその困り感は同じだったからです。補聴器を使っても、わかりにくさの残る感音性難聴は、騒音の有無や会話の相手の人数等の周囲の環境によって、聞き取りの理解度が大きく左右されます。補聴器をつけていても、いつも同じ量の情報を同じ音量で安定して聞いているわけではないのです。静かな部屋で大人との1対1の会話は90%聞き取れて理解できたとしても、いろいろな音が聞こえる3人以上の会話の理解度は20~30%になってしまうそうです。軽度難聴も中等度難聴も全てを聞いて理解できるわけではないこと、そこからコミュニケーションのずれが生じること、話せているから聞こえていると思われてしまうこと等、その困り感には共通する点が多かったのです。

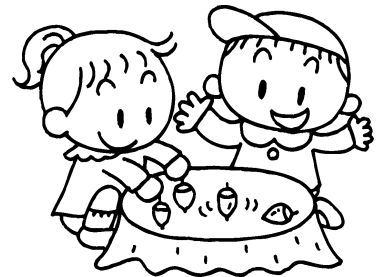
●軽度難聴は障害も軽い？

軽・中等度難聴は、補聴器をつければ聴力測定室では30~40dB程度の音にも気が付くことができ、聴覚をよく使っているように見えます。そのため、聞こえにくさがあるにも関わらず、周囲の人は「聞こえる人」として接してしまいやすいため、必要な配慮や支援が得られにくいという難しさがあります。このように考えると、難聴の程度が軽度だから、そこから生じる障害の程度も軽いとは、簡単には言えないことがわかります。



●自分の聞こえの曖昧さが分からない 「分からないこと」が分からない

幼い頃から、自分の考えや思いを話すことには不自由を感じずに過ごしていた若狭さんですが、小学校も学年が上がるにつれて、友達の会話がわからない、みんなと一緒に笑えないことが増えていきます。「聴者であれば息をするように自然に入ってくる生活のあらゆる細かな情報は、気づかないうちにたくさん漏れていた」からです。先生の雑談や友達のおしゃべりは、休み時間のにぎやかな騒音の中で交わされ、話題もあちこちに飛んでいきます。教科書にも載ることのない他愛もない会話ですが、聴者の子供たちはそうした情報も自分の中に取り込み、物事の過程や背景を考えながら成長していきます。一方で、若狭さんは「英語のリスニングテスト」のように聞くことに神経を使いながら過ごしていても、気が付かないうちに、そのような細かな情報をたくさん聞き落としていました。そうした雑談から学ぶ機会を得られなかったことで、自分の考え方に幼さがあることや、自己中心的になりやすい傾向があることを、ずっと成長してから若狭さんは気が付きます。それは大学生になり、ろう者の友人と手話に出会い、自分の聞こえる範囲よりもさらにその外に多くの情報があること、そして何よりも会話が楽しいものだと思った後のことでした。



●輪郭のぼんやりした世界

ずっと自分には手話は必要ないと考えていた若狭さんでしたが、ろう者の友人と手話での会話を経験するうちに、実は自分にも手話が必要だったと気が付きます。手話を使うことで、自分の曖昧な聞こえを頼りに頑張らなくても話が全てわかり、会話を楽しむことができたのです。手話通訳付きの大学の講義は、生まれて初めてその内容を全て理解することができ、嬉しかったそうです。しかしこうした体験は、若狭さんに喜びと共に苦しさももたらしました。手話と出会い、全てがわかる状況を体験したことで初めて、それまで自分が捉えきれずにいた情報の大きさに気が付き、若狭さんは愕然とします。

「みんなは、輪郭のはっきりした世界をずっと生きてきた。私は何て輪郭のぼんやりした世界を生きてきたのだろう。私の20年間は何だったのだろう。子供の時に、誰かが私に『手話を』と言ってくれていたら…。私はまた一から、私という人間を創らないといけないのか。」

どれほどつらい気付きだったことでしょう。懸命に生きてきた20年を根底からゆさぶられる苦しい時間だったことと思います。その時、若狭さんの立ち直りを支えてくれたのは、ろう者・難聴者・聴者と様々に聞こえの異なる友人たちと、互いの聞こえの体験を語り合ったことでした。若狭さんが通われていた大学には、聴覚障害者の心理臨床研究会というものがあり、そこでの学びと友人たちとの出会いがあったことで、若狭さんは自分自身の難聴と向き合い、難聴者としてのアイデンティティを築くことができたのです。

難聴者は、聴者の聞こえと自分自身の聞こえを体験的に比較できないため、本人にも（本人だからこそ）自分の聞こえの曖昧さががわかりにくい障害です。そして「聞こえる人」のように生活することが、より自らの聞こえにくさを隠し、適切な支援から遠ざかってしまうことになっていきます。自らの聞こえをきちんと理解し、適切な支援を求めて自分の能力を発揮できる人になるには、手話などを使って「全てがわかる」経験を積み重ねていくこと、同じ聴覚障害者のロールモデルや仲間との出会いの中で、聴者とは違う自分の聞こえを肯定的に受け止め、語れるようになることが、本当に大切なのだと改めて感じました。「片言でもいいから、本人に関係のない話も、子供の前では手話を使ってほしい。難聴者としての願いです。」大変重みのある言葉であるとともに、今すぐ実践できる道を教えていただきました。若狭さんの講演は動画配信もしています。ぜひご家族でご覧ください。（文責：松澤）

